

安全な国産グリーン社会

コラム
SDGS
Safety
Domestic
Green
Society

第7回

国際化と国産化における倫理学

—エコエティカとエンパシー

一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

大きな権力と資力を持つ組織でもある。国家は、同時に法的対応もできる裁量権すらも持つ。国家の権力は、諸外国の国々も同様であり、いづれも責任を執るべき立場になるかもしれない。国内/国外の境のない共通した考えと対応をもつ国際性、すなわち「フリクション・フリー」を自指さなければならぬ。

▼フリクション・フリー

ALPS処理水の海洋放出は、日本国の政策への近隣諸国からの反発など、国際間の一辺倒ではない多くの視点をあぶり出している。

日本国政府は、科学的な判断による決定である、その合理性を伝えていく。一方、中国側は、科学的な説明では合意できない感情的な反応を政策にしている。これは、国内と国外との区別ではなく、むしろ国際関係こそが重大な今日的な事情であること、を再確認させた。

前号で述べたように「国際性」とは、摩擦なく対応できること」であり、それは、場所や機会を提供する側と、その場を所機会を受ける側の二つの当事者が係わる。はその判断と実行を為し担

今道友信

Eco-Ethica

生圏倫理学入門

エコエティカ



連載

「エコエティカ」は、生圏倫理学入門として、文庫本にしてその普及に勉めたが、いまだ十分では

「環境」とは、自然と同意語としてとらえられていたが、前述のように科学技術が私たちの暮らしには必須の事物(人工物)となり、これも私たちの身の回りのもの環境となったが、いまの社会である。そこで

した社会を、今道は「技術連関」(conjunction technology)と名付けて国際語とした。

安全な確保という倫理的なことに気が配ることが重要となる。なぜなら、原子力事故は、小さくても大きくなる可能性がある。原因は、人災と物災のほか天災と協働することにより、巨大事故となること

が3・11により証明されたからである。それは、残念ながら、原発の安全を証明したのではなく、不十分であること

を明らかにしたのだった。今道は、「エコエティカ」に、3・11以前に、すでに次のように指摘していた。

「競争原理として営利が掲げられている在来企業がこれに着手して、世界じゅうの至るところで、新しい危険なニュートス(神話)をばらまき、現代火」が地球を超えた規模で、エネルギー源として商品化されているこの現状は、どれほど早すぎるということも、もたぬでもないことではないのです。..

▼女性の活躍 —エンパシー

自然へ人間の係わりは、自然を刺激してかなり変質させた。地球温暖化はその兆候の一つであり、異常気象をつくりだした。人間の暮らし(食料確保、健康や衛生など)を守るために、むかしは自然のままに過ごしていたが、今ではエアコンやヒートポンプが必須となつてしまった。結果は、ますます自然に負荷を与えている。自然の神々しさにも限界があり

このように、国際的な環境保全活動において、女性の存在と活動がめだつた。その背景には、女性のもつ「エンパシー」の能力にあると思われる。地球を守るためには、生圏倫理学、すなわちエコエティカとともにエンパシーへの理解が重要ではないだろうか。

▼技術連関

「環境」とは、自然と同意語としてとらえられていたが、前述のように科学技術が私たちの暮らしには必須の事物(人工物)となり、これも私たちの身の回りのもの環境となったが、いまの社会である。そこで

【註】今道友信、「エコエティカ」、講談社学術文庫(1999)

「環境」とは、自然と同意語としてとらえられていたが、前述のように科学技術が私たちの暮らしには必須の事物(人工物)となり、これも私たちの身の回りのもの環境となったが、いまの社会である。そこで